

黒一色 際立つメッセージ

米国で今月行われた「ゴールデン・グローブ賞」授賞式は、女優らがそろって黒のドレスを着用し、会場は黒一色に染まった。例年、華美な装いの競演が話題になるだけに異例のことだ。

（もう終わりにしようの意）への支持、被害者との連帯を示す目的もある。出席したほとんどの女優が、高級ブランドの黒いドレスやパンツスーツ姿で登場した。男性もタキシードに黒のシャツを合わせたり、胸にキャンペーンのパッチをつけたりして賛同を表した。異例の授賞式の様子はメディアやSNSを通して世界中



グロブ賞授賞式 女優ら セクハラ行為への抗議

に伝わった。「皆が黒い服を着ることは、強い意思表明の象徴として分かりやすい。一つのマーカー（指標）として、前後で時代が変わるという印象を与えた」と服飾史家の中野香織さんは分析する。最近、色でメッセージなど

を伝える動きが目立つ。例えば、一昨年の米大統領選。ヒラリー・クリントンさんの支持者らは、女性参政権運動のシンボルカラーである白の装いで投票を呼びかけた。昨年は、トランプ大統領の女性への差別的発言に抗議する「女性の行進」で、参加者たちはピンクの帽子をかぶった。今回の黒について、文化服装学院専任教授（西洋服装史）の朝日真さんは「授賞式は例

年あでやかなだけに今回の黒は印象的だった。黒は『喪』の色。男性中心の時代をリセットするというメッセージを感じた」と話す。

1980年代、デザイナーの川久保玲さんらが、それまであまり使われなかった黒を効果的に使った装いで、モード界に「黒の衝撃」を与えた。一般社団法人「日本流行色協会」（東京）の大野礼子さんは「黒は、静かさの中に秘めた強い意志を表現する色であり、着た人も強い気持ちになれる。今回の出席者もそうだったのではないかと話す。「タダシ・ジョージ」のデザイナー庄司正さんは今回、女優オクタビア・スペンサーさんが着た衣装を手がけた。最初から、「黒のドレスを」とのリクエストがあったという。「男性が黒いタキシードを着るのに対して、女性が白や赤ではなく黒いドレスを着る。女性と男性はイコールであるという強いメッセージを感じた。equality（対等）の黒で色の持つ力を発揮した」と庄司さん。

美しくも強い黒の装いは、連帯意識を高め、社会問題を喚起するファッションの力を改めて印象つけた。（生活部 谷本陽子、志磨力）



タダシ・ジョージのドレスを着たオクタビア・スペンサーさん



ディオールのドレスを着たナタリー・ポートマンさん（右）と、クリスチャン・シリアノのドレス姿のアメリカ・フェレーラさん